



## 学びが、町に広がる — 本市の教育のかたち

香美市には、保育園・幼稚園から大学までの教育機関がそろい、文化施設やスポーツ施設など、多様な学びを支える環境が整っています。こうした教育環境や地域の財を生かし、町のいたるところで世代を越えた「探究的な学び」が生まれる町を目指しています。

その根底にある教育理念が、「郷土を愛し、探究的に学び、未来を創る人づくり」です。子どもたちが自分の住む町に誇りを持ち、人や出来事との関わりの中で問いをもちながら学び続け、社会を主体的に切り拓いていくことを大切にしています。この理念のもと、探究的な学びを体系的に進めているのが、本市が推進するIB（国際バカロレア）教育です。本市では、この教育理念を実現するため、地域との連携・協働を柱の一つとして位置付けています。市内すべての学校に「学校運営協議会（コミュニティ・スクール）」と「地域学校協働本部」を設置し、両組織が一体となって、学校と「目指す子ども像」を共有しながら、子どもたちの学びと成長を支えています。制度として整えるだけでなく、人と人との関係性の中で学びを育んでいることが、本市の大きな特長です。

こうした本市の教育の考え方を、まさに体現しているのが、学校運営協議会会長と地域学校協働本部コーディネーターを兼ねる二宮景子さんです。本号では、二宮さんの歩みと実践を通して、地域の視点から見たIB教育と学校づくりについてお伝えします。

## 子どもに目を向ける原点 — 民生委員としての思い

二宮さんは、令和元年より主任児童委員として活動されてきました。民生委員の活動は、これまで高齢者支援が中心であり、「高齢者と子どもはセット」と言われながらも、実際にはお年寄りに視点が向きがちだったと振り返ります。「これからの香北を背負っていくのは、間違いなく子どもたち。だからこそ、子どもにしっかりと焦点を当てた活動をしたい」—その思いが、学校と深く関わる現在の活動へとつながっています。

## 地域と学校をつなぐ二つの役割

二宮さんは、令和5年より学校運営協議会会長、そして地域学校協働本部の活動推進委員として活動しています。学校運営協議会会長として学校運営に地域の声を届け、学校と地域が目標を共有しながら子どもを育てるため学校を支え、応援する立場として関わっています。また、地域学校協働本部の活動推進員として学校の教育活動と地域の人材・資源をつなぐため、給食配膳の支援、登下校の見守り、学習支援、校外活動の支援など、地域の力を学校に届ける調整役として奔走しています。「学校は学校の論理、地域は地域の思いや願いがある。その間に立って、折衷案を考えるのが自分の役割だと思っています」—二宮さんはそう語ります。

## 学習内容が地域と学校を結ぶ — ユニット学習を通じた協働

二宮さんが大切にしているのは、「学習内容そのものが、地域と学校を結ぶきっかけになること」です。その中心にあるのが、ユニット学習（探究学習）です。二宮さんは、IB教育への理解を深めるとともに、日常的に教室を回り、子どもたちの発言に耳を傾け、掲示物一つ一つに目を向けることを大切にしています。そうした姿勢を通して児童理解を深め、「この学びは、地域の何と、どのようにつながられるだろうか」と考え続けています。その中で、「ユニット学習は、地域と学校を自然につなぐ力を持っている」と実感するようになりました。学習のねらいや内容を事前に確認することで、地域に伝わる昔話を紙芝居で紹介したり、高知県のブラン

ド米である「蕪生米」の味を守る地域の方々の取組を学習に結び付けたりと学びが地域へと広がっていきます。「教員も地域について積極的に調べている。でも、地域に住んでいるからこそ分かること、学習に生かせるヒントがある。ユニット学習だからこそ、それを提案できるんです」—二宮さんは、地域の視点から学習内容を捉え、学校へと橋渡しをしています。



こうして、学習内容が起点となり、地域の人・もの・ことが教育活動に関わることで、ユニット学習は地域との協働へと発展していきます。学びを中心に据えた関係づくりが、学校と地域を無理なく、そして確かにつないでいるのです。

同校の北岡教頭は、二宮さんの存在について次のように語ります。「二宮さんは、地域と学校をつなぐ窓口であり、教員にとっての相談役です。地域のことをよく知り、学校の思いも理解してくれる、とても頼りになる存在です」。ユニット学習を支える舞台裏には、こうした信頼関係が確かに息づいています。

## 小学2年生ユニットに見る、学びの深まり — ちびっこエキシビションへ

小学2年生のユニット学習では、セントラルアイデア「町は時間的・場所的空間で成り立ち、人によって守られている」をテーマに学びが展開されました。このユニット学習の総括課題は、香北町の良さを自分たちの言葉で伝えることです。子どもたちは、町探検したことをもとに「香北町オリジナルマップ」を作成し、「香北町のたからものポスター」を用いて発表することを総括課題として、学習を積み重ねていきました。それがちびっこエキシビションです。



学習の過程で、ある児童が「保育園の頃からずっと”おおみや橋が”好きと語りました。橋にはホタルや紫陽花のオブジェがあり、その美しさに心を惹かれたのです。二宮さんはユニット学習を参観しながら、子どもたちが地域をよく見つめ、自分なりの価値を見いだしていることを実感しました。その後、二宮さんの提案で橋をデザインした地域の方が来校し、デザインに込めた思いを直接聞く機会が設けられました。子どもたちはその話を受け止め、学びをさらに深めていきます。かつて30年前にはホタルのオブジェが光っていたことなど、地域の記憶も学習と重なり、学習内容が一層豊かなものとなりました。



こうして積み重ねてきた学びは、ちびっこエキシビションの場で発表されました。子どもたちは、自分たちが見つけた香北町の魅力を、マップやポスターを使って堂々と伝えました。ユニット学習での探究が、地域に向けた発信へとつながった瞬間でした。

ちびっこエキシビションでは、大人が真剣に子どもの話を聞きます。子どもの発表から、大人が知らなかった地域の価値に気づく場面も多くなりました。「町のことをこんなにも素敵に表現できるなんて」—地域の人々の驚きと喜びが、会場に広がります。かつて活気に満ちていた時代の記憶が呼び起こされ、世代を超えた対話が生まれました。

二宮さんは、インターネットや本だけの調べ学習では得られない、心の動きを大切にしています。ユニット学習では、「ひと・もの・こと」について調べる・実際に会う・聞く・見る・感じるといった行動を通して学習内容が社会と結び付き、実感を伴った学びの深まりを導いています。

## 小中連携が支える、9年間の学び

小学校で育まれた探究的な学びは、小中連携によって同校区内にある香北中学校（IB認定校）へと確実につながっていきます。ユニット学習やエキシビションで培われた「地域を見つめ、価値を見だし、伝える力」は、その後の9年間の学びの土台となっています。



中学校では、ユニット学習はもちろんのこと、コミュニティプロジェクトを通して、地域の一員として社会に参画する学びが展開されています。小学校での学びを基盤に、より社会のニーズに迫る視点で課題を捉え、行動へとつなげていく姿が見られます。熱中症対策や災害対応の自動販売機の導入、新制服の導入、ウクライナ支援、保護猫活動の取組など、生徒自身が考え地域と協働しながら進める実践が広がっています。小学校で芽生えた探究心は中学校で社会参画へと発展し、学びはより広く、深いものへと成長しています。

二宮さんは、こうした中学校の取組にも常にアンテナを張り、地域に向けて積極的に発信しています。取組が伝わることで、地域の方々の関心は自然と学校に向かい、「自分たちにできることがあれば」と、無理のない形で学校を応援する動きが広がっています。二宮さんの発信は、学校の取組を地域に届けるだけでなく、地域の思いを再び学校へと戻す循環を生み出しています。

## 意識調査から見る子どもたちの変容

このように、9年間の探究的な学びは、実践の中で着実に積み重ねられてきました。では、こうした学びの積み重ねは、子どもたちにどのような変化をもたらしているのでしょうか。

本市が実施している学力学習状況調査の意識調査において、中学1年生（5月）と中学3年生（5月）を対象に同一集団の意識の変化を変化量を分析しました。その結果、IB教育導入以降、いずれの学年においても共通して変化量が大きかったのは、学習方略における「柔軟的方略」（学習の仕方を自分の状況に合わせて柔軟に変更していく活動）と「プランニング方略」（計画的に学習に取り組む活動）でした。

これらの力は、ユニット学習を通して地域の人や出来事と関わりながら課題を見だし、試行錯誤しつつ探究を進めていく過程の中で育まれてきたものと考えられます。地域をフィールドとした学習では、あらかじめ用意された答えはなく、自分の学び方を調整しながら探究を進めていく必要があります。こうした経験の積み重ねが、学習の進め方そのものを主体的に考える姿勢へと子どもたちを変えているのです。こうした変容を確かなものとして次の世代へと引き継いでいくことが今後の本市のIB教育に求められる役割です。

## IB教育の使命と地域から世界へと持続可能なIB教育に向けて — これからの展望 —

教員の異動があっても、IB教育の質を落とすことなく、むしろ進化させながら継続していくこと。そのためには、学校だけでなく、地域が共に学びを支え続けることが欠かせません。二宮さんは、地域が学校を支えることで、子どもたちの学びはより深く、確かなものになると考えています。

「地域は『土の人』、教員は『風の人』。土があるからこそ、風が吹いても学びは根つき、広がっていく」—これは本市の教育理念そのものが重なります。郷土を愛し、地域に学びながら探究を深め、未来へとつながる力を育む。その営みは、学校の中だけで完結するものではありません。

学校運営協議会を核に、地域と学校が「目指す子ども像」を共有し、IB教育が掲げる10の学習者像を意識しながら、同じ方向を見て歩いていく。そこには、世代を越えて学び合う姿があります。

町のいたるところで学びが生まれ、人と人がつながりながら子どもを育てていく—それは、本市が目指す「郷土を愛し、探究的に学び、未来を創る人づくり」そのものです。IB教育は、学校だけの取組ではなく、地域と共に未来を創るための、本市の大切な宝なのです。